

An Educational Program in a Fishing Village in 1950s: Focused on the Survey of Tomisaki Village in Awa District, Chiba Prefecture, conducted by Ota Takashi-Laboratory in the University of Tokyo

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-12-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: TORII, Kazuyo メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00056462

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



1950年代の漁村の教育計画

—東京大学大田堯研究室の千葉県安房郡富崎村調査から—

An Educational Program in a Fishing Village in 1950s:
 Focused on the Survey of Tomisaki Village in Awa District, Chiba Prefecture,
 conducted by Ota Takashi Laboratory in the University of Tokyo

鳥居 和代

TORII, Kazuyo

はじめに

本稿は、1950年代初頭、東京大学教育学部助教授であった大田堯（おおた たかし：1918～2018）と大田研究室の大学院生、および千葉県教育研究所の所員による共同調査に基づく、漁村の教育計画へのかかわりを検討するものである。具体的には、千葉県安房郡富崎村の調査をもとに、特定の漁業地域の教育計画について、大田研究室においてどのような分析・評価が行われ、それに対して富崎小学校の教師がどのように対応したのかを明らかにする。

戦後日本の地域教育計画は、コア・カリキュラムの動向とともに、カリキュラムの改造および自主編成の試みとして注目されてきた。戦後改革期における埼玉県川口市の「川口プラン」や、大田堯が指導した広島県豊田郡本郷町の「本郷プラン」などはその代表例である。本郷プランについては少なからず研究の蓄積があり、まとまった主要な著作の1つに福井雅英の研究¹が挙げられる。福井の研究の特色は、本郷プランをその研究・実践を担った本郷小学校の教師の側から描出しようとした点にあった。

ところで、戦後の地域教育計画に関する先行研究については、次のような課題も指摘されてきた。たとえば、これまで着目されてこなかった矢口新（やぐち はじめ：1913～1990）の地域教育計画論を検討した越川求は、「従来の研究においては、地域教育計画論は、本郷プランまでの評価であり、50年代から60年代の実践を対象にした研究はなされてこなかった」²とし、

「1950年代の地域教育計画論について残された課題は、各地域の教育研究所の地域教育計画の検討」³だと述べている。実際、戦後改革期に進められた本郷プラン以降も、大田堯は50年代にかけて各地域の実態調査を踏まえ、当時実施されていた教育計画への評価や問題点の析出などを通して、地域教育計画にかかわりを持っていた。本稿ではこの点に注目し、50年代前半に千葉県教育研究所が調査研究に協力した地域教育計画の1つである、富崎村を舞台とした漁村の教育計画を新たに検討対象とする。また、大田研究室による漁村の教育計画への分析・評価を取り上げると同時に、富崎小学校の教師たちの応答を検討する。この作業を通じて、福井の研究において重視された教育計画における教師の位置や役割——ただし、必ずしも大田研究室が提起した教育計画論と予定調和の関係にはなかったが——についても、本稿は焦点を当てることになるだろう。

1. 千葉県安房郡富崎村調査

まず、千葉県安房郡富崎村の調査の概要⁴について触れておく。

房総半島の最南端に位置する富崎村（1954年5月～館山市に編入）は、布良・相浜の二部落からなり、房総西線の館山からバスで約40分ばかりのところにある土地総面積0.538km²ほどの狭い村であった（図表1）。1952年時点で人口3,188人と人口密度は千葉県の中でも高い数字を示していた。職業別世帯数では圧倒的に漁業



図表1 安房郡富崎村

が多く、全体の63%弱を示し（632世帯中398世帯）、次いで商業、工業、公務員、一般事務などの順であった⁵。富崎村の漁業は、明治期にマグロ延縄業が盛んとなったが、大正末期にはその従事者もわずかとなり⁶、戦後49年の魚類の生産高はアジ（47%）、イナダ（14%）、カツオ（8%）、スズキ（5%）の順に多かった⁷。また、58年の漁業種類別経営体数を見ると、布良と相浜をあわせて釣漁業101、敷網漁業13、刺網漁業8、小型定置網漁業5、延縄漁業2、採貝1であり⁸、一本釣りははじめ敷網や刺網などによる沿岸漁業が主流であった。

1953年2月中旬、大田堯は東京大学のゼミにおいて富崎村を調査対象に選び、「漁村における地域の教育計画は、その社会や子どもの生活の問題と、どんな関係のもとに実施されているか」を調査の中心目標とした⁹。大田は富崎村の選定にあたり、「生産構造の面から見て、一本釣が主で兼業としての農業が殆んどない純漁村であるため、比較的単純で、閉鎖的な性格を持っているであろうと思われること」、「面積が狭く、従って戸数・人口ともに比較的少く、技術的に調査が容易であろうと考えたこと」を主

な理由に挙げていた¹⁰。大田研究室は、調査地選定からほどなく53年3月（予備調査：3泊4日）、7月（教育意識と児童生活実態調査：6泊7日）、9月（教育計画調査：3泊4日）の計3回調査を実施¹¹、その結果、「我々の最初の見通しのとおり、この村の教育計画は先生方なり指導者なりの非常な善意にも拘らず、この村の主体である漁民の生活を素通りした宙に浮いたものになつてしまつている」¹²との結論を導き出すに至る。富崎村では漁業従事者（「漁師」）とそれ以外の者（「岡者」）との間に、生活の面でも意識の面でも大きな溝が存在しており、「岡者は漁師に対して教養のない無知な労働者として軽蔑の眼を向け、漁師は岡者に対して羨望を交えた諦めの気持を示し、劣等意識を持つ」という問題が捉えられた¹³。このような漁師（浜者）と岡者との複雑な関係があるなかで、村の「主体」としての浜者の生活や立場を軸とした大田研究室の問題認識は、後述するように、富崎村の各方面にわたる教育計画の分析を貫くものであった。

2. 千葉県教育研究所紀要『漁村の教育計画』

戦後、千葉県は各地域・各学校が具体的な教育計画を樹立するための資料として千葉県基準カリキュラムを編成した。千葉県教育研究所の学校教育部第2室の所員らの協力のもとに実施された大田研究室による富崎村の調査報告は、県基準カリキュラムに基づく特定地域の教育計画にみられる問題の解決やその方向づけを提示するものであった。富崎村の教育計画に関する調査報告書と、それを受けて千葉県教育研究所の実験学校であった富崎小学校がまとめた実践記録ともいべき報告書は、千葉県教育研究所の研究紀要として1950年代半ばに発行された。

①『漁村の教育計画—安房郡富崎村に於ける調査—附 二つの教育計画』（第14集、1954年）¹⁴、および②『漁村の教育計画 第二集 計画篇』（第22集、1955年）¹⁵がそれである。ユニークなのは、①が大田研究室から富崎小学校の教師や地域の指導者に宛てた通信、②は富崎小学校の

図表2 『漁村の教育計画』内容構成

①『漁村の教育計画』(研究紀要 第14集)	②『漁村の教育計画』(研究紀要 第22集)
第一信 問題は何故残るのか ●	一 ことばの教育
第二信 生活に根ざす劣等感	二 音楽教育 ○
第三信 子供の労働 ●	三 子どもの労働
第四信 教科学習の方向は	四 子どもの貯金—子ども郵便局を中心として—
第五信 特別教育活動の在り方は ●	五 子どものあそび ○
第六信 P・T・Aはこのまゝでよいか ●	六 夜あそび ○
第七信 青年学級の問題は	七 子どもと部落行事—初午の場合— ◎
第八信 富崎の教育を動かしているものは	八 親子関係 ◎
	九 子どもと家庭生活 ◎
	十 PTAについて

教師から大田研究室に宛てた返信として書かれ、往復書簡の形式で教育計画をめぐる研究と実践の結びつきが記録されている点である。ただし、個々の通信が書かれた年月日は不明である。②の計画篇には、さらに返信の返信として項目ごとに大田研究室の所見も添えられて発行された。本稿では主にこの2つの資料に依拠して、富崎村の教育計画について検討したい。

検討に先立って、①と②の『漁村の教育計画』の内容構成から、どのような項目が取り上げられているか、また大田研究室と富崎小学校の教師との間でどのようなテーマをめぐるやりとりが行われていたかを整理しておく(図表2)。②に関しては、富崎小学校の教師の応答にあたる「IV 計画篇」の目次のみを挙げた。①と②の項目内容がおおむね相互に対応している場合は、線でつなげた。②の○を付した項目は、①の教育計画の分析では触れられていないとして、富崎小学校の教師から新たに大田研究室に問いが投げかけられたことがらを示す。また◎を付した項目は、①では主題として扱われていない点では○の項目と同様であるが、①の分析・評価を富崎小学校の教師が積極的に受容し、それに触発されて独自に追究したことがらを示す。

3. 漁村の教育計画をめぐる研究と実践

千葉県教育研究所の研究紀要『漁村の教育計画』①と②に基づき、主なテーマごとに大田研

究室と富崎小学校との教育計画をめぐるやりとりをみていく。以下、『漁村の教育計画』からの引用箇所は、本文中に(①:頁数)、(②:頁数)などと表示することとする。

大田研究室は①の最後の通信「八 富崎の教育を動かしているものは」において、「富崎村の教育計画は、真に漁民の中から盛上つて来た力によるものでなく、支配階級たる一部の岡者が上からの力として、働きかけた教育であった」と結論づけた(①:46-47)。そのように評価したのはなぜか、それに対して教師はどのように応答したのか。テーマ別に順次検討したい。

(1) 標準語の指導と方言

大田研究室は「第一信 問題は何故残るのか」において、富崎小学校における教育計画の「障害点」の具体例として、ある漁民の子どもの盗みの問題と、「無口」な漁民の子どもの問題を取り上げた。前者には、盗みの行動の下地に家庭環境による抑圧があること、後者には、学校における標準語の指導に問題があることを指摘するものであった。

大田研究室は無口な子どもの問題を考えるにあたり、子ども会準備の授業時間にクラス全員39名中、23名の子どもの発言しなかった例に言及した(①:5-9)。そこでは、授業で無口な子ども、授業の発言者の知能指数、親の職業、成績を示した表の分析によって、無口な子どもの多くが女子であり、発言者の3分の2が男子であることが指摘された。また、無口な原因が

主として「学業不振」や「頭の悪さ」から来るという認識への疑問が呈された。すなわち、無口の原因はむしろ「1 子供会で発言する子供が多く標準語に長じて居り、先生も亦、標準語をすゝめておられる」こと、また「2 学習が子供達の生活の問題と離れている」ことにあるのではないかと問題提起したのである(①:7)。とくに1点目の標準語指導については、無口な子どもが男子よりも女子に多いことの説明には必ずしも当たらないとはいえ、これまで富崎小学校において学業不振や知能からくると考えられがちであった無口な子どもを生み出す原因を、浜者のことばである方言を使わせない国語教育の問題に見出す視点であった。

もっとも、大田研究室も標準語は必要であるし、標準語でものを通じさせることはある場合には非常に大切であると認めていた。しかし「それを押しつけ、それによつてしやべらせようとする場合、子供達は自分の生活の表現を封じられてしまうのです」(①:7-8)、「こういった方言を封じる為に、多くの漁民の子を無口にし、精神発達を妨げてしまうと言う様な事になるのではないのでしょうか」(①:8)と投げかけた。

以上のような分析視角は、保護者の要求もあって標準語の指導を当然と考えていた富崎小学校の教師たちに、人により考え方の深さや広さに違いはあったものの、「反省」を促すものとなった(②:6-7)。そこでまず、子どもたちに標準語がどれくらい身につけているかに注意してみたところ、かなり「学校ことば」としての標準語が身につけてきた6年生でも、大抵の子どもは自分の考えをすらすら話すには富崎ことばを使った方がよいようだとなり、子どもたちが自由に意志を表現できるかどうか確かめずに標準語を奨励すると、第一信の指摘どおり、標準語の強制となり、子どもたちの生活の表現を抑圧する結果を招くことがはっきりしてきた。このため、富崎小学校の教師たちの中には、子どもの話しやすさを考慮して標準語を最初から話させることをしない、あるいは富崎ことばを矯正する方法はとらないといった従来の

実践を見直す動きもみられた(②:7)。

ところが、このような富崎小学校の教師の実践は、すぐに標準語を教えてくれという「親からの反撃」に合うこととなった(②:7-8)。銀行勤めの父親、東京に嫁いだ姉などが、富崎のことばや人間を「下等」で「卑しい」ものとする考えを取り入れているエピソードなどを紹介し、そこに東京や館山に対してもつ「劣等感」を読み取った教師たちは、「親の要求だからといって、ただうのみにして標準語を教えることの危険」を自覚していた。ただし、それは標準語を教えなくともよいということではなく、富崎を離れて働きに出る子どもが増加することが考えられる場合、自分の意志を自由に表現するために標準語の勉強が必要になると教師たちは考えていた(②:8)。そこで、教師たちはまず富崎ことばへの「不当な劣等感をなくしていく」こと(②:9)、この問題の解決の上に標準語の指導を考え、必要に応じて、ただし標準語を「優越感と結びつけずに」、子どもたちの人間関係の広がりや交通の範囲の広がりにしたがって指導していくことにした。最初は反撃していた親も、ほとんどがこうした教師の意見に同意してくれたという(②:9-10)。

大田研究室は、以上のような標準語と方言をめぐる富崎小学校の実践報告を読んで、真剣にことばの問題に取り組んでいることを評価した。そしてことばの問題を「あまり技術的に考えていくと誤りがおきやすい」ことに注意を促しつつ、標準語か土地のことばかではなく「思うことが自由にいえるという雰囲気を作ること」、「人間関係を正しくしていくこと」が根本だとし、今後の実践を励ましている(②:10)。

大田研究室による、無口な子どもと標準語指導との関係分析は、保護者の要求との板挟みに遭いながらも、子どもたちの生き生きとした姿と豊かな関係づくりを保障することばの教育とは何かを、富崎小学校の教師たちが再考するきっかけになったと考えられる。

(2) 漁民の生活と劣等感

大田研究室の「第二信 生活に根ざす劣等感」

は、上述の無口な子どもの要因の2点目にかかわって、学習が子どもの「劣等感」を生み出す生活を掘り起こさず、素通りしていることを問題にした内容であった。「劣等感を生み出す子供達の生活が明るみに出され、又この村の問題である貧困と言う事実がクラスの子供達共通の問題となつて、それについて学習し、その根源をつきつめ、共同して解決する方向に学習が進められた時に始めて貧困家庭の子供が劣等感から解放され、自分の経験を生かす人間への自覚が生まれて来るのではないか」というのであった(①:9-10)。この考察の前提として、大田研究室は、富崎村で働く漁民の歴史や漁業史を振り返り、社会の仕組みからくる漁民の劣等感に着目した。すなわち、国家権力を背景として、岡者が自らの利益のために漁民を沖合に進出させ、のちに衰退して沿岸漁業へと変わり、漁民の生活が次第に苦しくなっていく経緯を、漁民が常に搾取と不安定な生活の下に置かれてきた歴史として把握し、そこに漁民のもつ劣等感の大きな原因を見出した(①:12-14)。

このような歴史的・社会的に形成されてきた漁民の生活に根ざす劣等感という視点は、岡者と浜者との間の生活実態に差異があるかどうかを念頭に置いた、②にみる教師たちの各種の実践報告に少なからず影響を与えることとなる。

(3) 子どもの労働

大田研究室は「第三信 子供の労働」において、漁民にとっての労働が「岡者に対する劣等感の根拠」となっており、それゆえに漁民の子どもたちにとってもまた「生活上大きな負担になつている」ことに注目した(①:15)。富崎小学校の先生が家の手伝いの尊さを教え、労働をすすめていることは正しいことだとしつつも、それが「抽象的な観念」で教えられるのではなく、子どもたちが家庭での労働生活や自分たちの経験する具体的な労働を語り合える場を作ること、そして労働を共通の問題として皆で解決し、互いにすすめ合う人間関係を作っていくことが必要だとした(①:16-17)。「自分達の労働によつて、自分達の居る社会を少しで

もよくする事の出来る」ことが必要であり、子どもたちが働いた経験を大切にし、これをもとにして労働が生活をどうよくしたかの判断力を養うことが教育の上で最も大切であると述べた(①:18)。

しかしながら、この通信を受けて、富崎小学校の教師たちの内に湧き出てきたのは「問題はまだ残る」という思いであった。というのは、大田研究室が「社会の側に立って」問題を洗い出したのに反して、自分たちは「子どもの側に立って」子どもを見つめ問題を受け取っているからだというのであった(②:20)。教師たちにとって、学校で把握できる範囲における目の前の子どもたちを、子どもの労働の観点から今どう指導するかが課題なのであって、目の前の子どもの人格形成に影響を与えている家庭・地域での労働生活には、必ずしも十分に視野が及んでいなかったように考えられる。そのことが、以下にみる子どもの労働をめぐる大田研究室の認識とのずれを生じさせることになった。

大田研究室の通信を読んだ教師たちは、他の教科学習面に比して、家庭条件的差異も学校的能力差も関係することの少ない「学校的労働」の一場面として、「学校における掃除」に関する報告を大田研究室への返信としてまとめた。そこで示されたのは、教科学習で無口な子どもは、掃除の場面でも「自己を誤った好ましくない方向に発露し怠け邪魔をしている」こと、学校での掃除に対する態度は、岡者と浜者の差よりは、男女差、学業成績差によること、掃除を罰と受け取っている者もあるが、大多数は生理的条件(冬は水が冷たい、しもやけやあかぎれができる、学習で疲れている)から嫌なものとしていること、この生理的条件と「労働する漁民の子としての劣等感」が子どもの中でそれぞれどう位置づいているのかわからないこと、具体的に「労働」の意味・価値に目覚めさせ、生理的嫌悪感を取り除いた掃除のあり方はどうあるべきかわからないことであった(②:24頁)。大田研究室の指摘を受けてもなお残る、教師たちの子どもの労働にかかわる指導の戸惑

いと割り切れなさが正直に表されたのである。

学校における掃除に焦点づけた富崎小学校からの返信を受けて、大田研究室は「掃除を例にとっての考え方が、必ずしも真意をつかんでいない点があります」と相互の見解にずれがあることを示唆するコメントを返した。「一番大事なことは、子どもの労働イコール掃除という考え方をもっと深めること」であり、掃除は労働の細かい一部に過ぎないため、狭い意味に考えないで、「子供たちが体で受けとめた経験を基にしてみんなで考えをつみあげて行く、そういうことのねうちを認めて育てて行くと広く考えたいと思います」と続けた(②:24)。大田研究室と富崎小学校の教師との間で、漁民の生活に密着した日常的な手伝いと、他方で学校における掃除といった、子どもの「労働」の受け止め方や考え方の違いが浮き彫りになった場面であった。

(4) 教科学習

大田研究室の「第四信 教科学習の方向は」では、「勉強しない子供」「出来ない子供」をどうしたらよいかを検討課題とされた。まず、富崎小学校の高学年で実施されていた能力別の段階学習について、先生方が個別的に指導しようとするうえで非常に価値があると述べつつも、上級グループにある者は優越感をもち、逆に下級グループにある者は劣等感をさらに強めてしまう問題を含んでいると指摘した(①:19)。このような相互の優越感や劣等感を持たず、誰にでも何でもしゃべることができ、クラス全体が一緒になって問題を解決していく態度を持つ「横に結ばれた人間関係」を作ることが必要であり、「人間全体の能力を生かし、対等な人間関係として発言し、解決に協力して行く学級〔学級共同体〕——引用者注」を作つて劣等感を克服する事が先決問題」だと論じた(①:21)。子どもたちの能力差の克服の前提に、個人が人間として尊重し合う関係づくりが考えられなければならないことを主張するものであった。

次に、いくつかの教科学習について言及がな

された。社会科学習については、6年生で新聞とラジオが教材になったとき、クラス39名中、ラジオのない子どもが3分の1、新聞もラジオもない子どもが10人くらいだったことから、教師がこれらの子どもたちのために小学生新聞を作ったり、ラジオニュースの子どもの時間等の番組をテープ・レコーダーに録音して聞かせたりしたことを「先生方の態度には全く頭の下がるものがある」と大田研究室は評価した。しかし同時に、新聞もラジオもない子どもたちの「何かモヤモヤした気持ち」、つまり日常生活に埋没している「日常の直接経験」を掘り起こし、自分たちの意欲に気づかせること、こうした地盤に立って初めて、学習が子どもたちの生活の中に位置づけられると述べた(①:24-26)。

理科学習については、「腹の病気について」の討論を機に、子どもの身近な経験を取り上げて、そこから消化や身体器官の働きに関する理科学習へと導入したことを「まことに順当なもの」と大田研究室は評した。しかし、理科学習ではこうした「科学的事実」を教えると同時に、「この科学的事実をもつこの村のこの子供達の生活の中に位置づける事が必要」だと指摘した。たとえば、漁師の家での食事時間の不規則、休憩を阻む家事労働、経済的事情からくる偏った食事、衛生的知識の低さ、迷信などなど、子どもを取り巻く具体的な環境の中で問題が展開されてこそ、生きた理科学習となるとの考えが示された(②:26-27)。大田研究室が問題にしたのは、具体的な生きた人間の生活実態を通り越して、科学の法則のみを説明しようとする教科学習のあり方であった。

同様の視点は、富崎小学校が進めていた「健康教育」にも向けられた。大腸菌が検出された井戸水の消毒のための晒粉まき、子どもの回虫駆除、家庭の小さい照明による子どもの近視といった健康教育の問題への学校側の努力もほとんど効果を得られない村の実態に対し、「勧めに従って治療しない者には今後、保健所の強制力を利用する他はない」といった学校側の態度や考え方を「上からの押しつけ」として批判し

た(②:28-29)。教育が漁民のための思いながらも、実は岡者中心のものになっていると大田研究室は捉えた。したがって、漁民たちが自ら晒粉をまこうとする状態を作っていくことが必要であり、その状況ができて初めて、科学が村の生活の中に根を据え始めるとした(②:30)。

教科学習の面から、漁村における親や子どもの生活意識を離れた科学のあり方を問題視した大田研究室の提起に対し、富崎小学校の教師たちからの応答はみられなかった。

(5) 子ども郵便局

大田研究室は「第五信 特別教育活動の在り方は」において、富崎小学校における子ども郵便局の活動を取り上げた。子ども郵便局(こども郵便局、子供郵便局)とは、親金融機関によって子ども銀行や子ども協同組合とも称された、子どもの自発性と経験を重視する戦後新教育の中で生まれた校外生活指導の一環であった。この実践は、戦前の学校貯金の延長線上にありながらも、戦後の貯蓄奨励策などを背景に1949年~51年に急増、各学校の課外活動や社会科の中に当初位置づける試みがなされた。その後、51年『学習指導要領』改訂を機に、小学校では「教科以外の活動の時間」の中に位置づけられた¹⁶。ただし大田研究室は、中学校でいうところの「特別教育活動」として子ども郵便局に言及していた。

大田研究室は子ども郵便局について、「宵越しの金は持たぬ」といった従来の漁民の習慣を打破していくためにまことに必要であり、また効果があると述べる一方、全体的にみると「この貯金の成功が、学校の奨励する貯金と、『将来子供達の為になるだろう』という親の素朴な要求との結びついたものであつて、子供の実生活の生活を素通りして居る様に思われます」と指摘した。貯蓄の源泉が主として子どもの「禁欲」に求められると「貯蓄人間」が高く評価されるようになり、子どもたちの意識が「このお金でどうすれば生活を良くすることが出来るか」ではなく、「貯蓄する喜び」に向かうことの問題

点を剔抉したものであった(①:32-33)。

これに対する返信において、富崎小学校の教師たちは、子どもの「買喰い」は大きな「浪費」であるとの考えにほとんど疑問をもたず、そのような「悪いこと」を打ち破る有力な教育活動として子ども郵便局を考えてきたと説明した。そして読後まず感じたことは「若干の不満」であると率直に述べた(②:25)。大田研究室の問題点の指摘に関して、私たちが同じような考えで運営してきたからだというのが理由であった。しかし読んでは考え、話し合っているうちに、「お金の正しいつかい方」を「考え」として重視したが、具体的にそのように指導してきたか、また多少そのような指導をしてきたとしても、それによって子どもの考え方や行動が変わったのか、という反省点を教師たちは自覚するに至った。やはり大田研究室に指摘された「ズレタ方向」を子ども郵便局がたどっていたことを認めざるを得なかったと記した(②:26)。

そこで教師たちは、家庭訪問やPTA会合の折に、子ども郵便局に関して数十名の保護者や子どもに意見を聴取した。その結果、父母も子どもも「貯蓄人間」の方向を是認していることがわかり、その上に「安居」してしまい、子どもがどう変わったかを考えることが足らなかったと振り返った。よって再度、保護者や子どもの意見を吟味したところ、子ども郵便局にはかなり多くの賛成論もあったとはいえ、ある浜者の母親から次のような意見があったとき、「予想外に多い賛成者が生まれ」、教師を面食らわせたとのエピソードを紹介した。その母親の意見とは、始めは先生の言うとおりに小遣いを買喰いなどに使わず貯金するよう子どもに言い聞かせてきたが、子どもがお店の前で遊んでいると買いたくなるから、夕飯まで浜に行き遊んでいるよとトボトボと海岸の方に行くと、とても可哀想になって「いいよ、いいよ、貯金の金は貯金日に又やるから今日は好きなものを買え」とつい言ってしまう、理屈はよくわかるがこのままでは子どもが可哀想ではないか、とい

う趣旨であった(②:27-28)。

このため教師たちは、小遣いを節約して貯金を押し進めると買喰いを止める方に偏っていくため、現段階ではある程度は認めざるを得ないこと、しかし腹持ちのするものを考えて買うなど買喰いの仕方をできる限り指導すること、母親も家でのおやつなどを考えて徐々に小遣いを節約させることなどを申し合わせ、「予算生活」へと子どもを指導していくことを今後の展望とした(②:30-31)。

以上は、子ども郵便局について教師たちなりに再検討した実践報告ではあったが、大田研究室はこの返信に対し、「余りにも貯金にとらわれています。貯金のしかた」ということは大きな問題があります」と端的にコメントした。貯金どころではなく毎日毎日を生き抜くのに精一杯の人について考え、貯金が一番適当な方法であるかを考える必要があるとの指摘であった。むしろ大田研究室が「非常に感銘をうけたのは、教師が紹介した浜者の母親の意見であった。これを「学校のせつかな理詰めの対策に対して、母親が情念をふりしぼって訴えている」と捉え、この点をじっくり考えてみることを教師に促したのであった(②:32)。

富崎小学校の子ども郵便局の実践について、大田研究室はあくまで漁民たちの金銭にまつわる具体的な日常生活感情をすくい上げ、直視するところから見直されるべきことを期待した。

(6) PTA

大田研究室の「第六信 P・T・Aはこのまゝでよいか」では、富崎小学校の学級PTAの集まりの悪さと家庭訪問の形式化が問題とされた。漁民や岡者の下層の親がなかなか出席しないといったPTAの集まりの悪さを、経済的余裕のない家庭の事情や教師との会話の堅苦しさなどによるものと考え、こうした教師の反省や熱心さから実施された家庭訪問が「一分間訪問」のような形式的な面接へと行き悩んでいる現状が問われた(①:33-35)。この原因を大田研究室は富崎村の歴史的背景の中で把握した。すなわち、岡者という支配階層の要求に応

じた富崎の教育が、歴史的に漁民の貧困な生活と縁遠いものであり、戦後のコア・カリキュラムもその継続と捉えられた。このような富崎の教育を変えて、「働く漁民の生活を向上させ、労働を最も大切なものと自覚させる教育」、「生活の中から出て来る力を伸ばして行く教育」へと向かうことを大田研究室は求めた(①:36-41)。

富崎小学校の教師たちはこの通信を読んで「もっともだ」との思いをもった。PTAの実行委員会の職業別構成メンバーをみると、富崎の62%を占める漁業者に比し、実行委員は22%と極めて低い率であり、しかも漁業関係の上層部が多く、また実際の会議の出席者中、漁業者は2~3名くらいであることから「岡者中心に進められ勝ち」だと振り返った。その原因を教師たちは、漁師の話や生活実態から、時間的余裕がない、人前で思うように話せない、貧困である、職業的に劣等感をもっていることの4点に見出した(②:61-63)。そこで学校側としては「漁民の声をきくためのPTA活動を盛んにする」ために、「職員が部落へ進出する」、「家庭訪問を度々する」、「学校へくる親がひげ目を感じることのないように教師は子どもの扱いを考える」、「どこの家でも考えられるような具体的な問題を話し合って会を進める」、「適当なりクリエーションを取り入れ、子どもを通しての人間関係を作っていく」、「会議の議題をはっきりさせる。前もって日程を印刷して、子どもを通して親に通じておく」、「会議を開く日を漁民の出席しやすい日にする」などの点に努力していることを報告した(②:65-66)。

大田研究室は以上の返信を「非常によくまとまった報告」であるとし、「よい方向に深められていくことに大変関心を持ちました」と書き記した。「親を説得するといった学者めいたい方」の「反省」の上に立った具体的追求として、漁民の親と教師とが生活を通してつながっている点に価値を認めたのであった(②:67)。

(7) 青年学級

大田研究室は「第七信 青年学級の問題は」

において、社会教育の一環としての青年学級に欠席者が多く「衰退の道をたどる」理由を分析した。第一に、この計画が文部省一県一郡の各社会教育関係者が机上で作った計画案をほとんどそのまま実施しているに過ぎず、しかも主として岡者が運営していること、第二に、本当に生活と取り組んでいる青年の必要性を満たし得ないこと、第三に、教育方法がすべて授業方式で、青年たちの「自主性」「主体性」が生まれもしないし生かされもしないことが理由に挙げられた。なかでも青年たちの意欲の掘り起こしができないのは、青年学級を受け止め、大衆に施す人たちが岡者だからではないかというのが大田研究室の意見の眼目であった(①:41-44)。

社会教育計画にかかわる青年学級の問題に絞った教師からの応答はみられなかった。

(8) 音楽教育(情操教育)

富崎小学校の教師たちは、これまでみてきたような大田研究室の側で設定された教育計画に関するテーマに限らず、自分たちの問題関心に即したテーマも取り上げた。たとえば、教師たちは「二 音楽教育」において、①の『漁村の教育計画』の中には「情操教育について、何ものべられてい」ないが、私たちは「大切なことだ」とし、情操教育としての音楽教育にテーマを絞った(②:11)。ここでは、3年生以上に実施した調査から、音楽の勉強が好きな子どもは7割以上いること、流行歌を歌う子どもは多く、親の職業別にみても大差ないことなどを把握した。この結果を受けて、教師たちは流行歌をどう考えるかを考察した。流行歌を作り広める側は、「流行歌のもつ不健全な感傷や無思想」に親しませることによって、社会の仕組みへの大衆の批判をそらす役割を果たしているとし、それを積極的に広めるマスコミの働きの面からも「流行歌対策」が考えられなければならないと述べた(②:12-16)。そこで学校の音楽教育では、子どもたちの生活感情からの出発、技術の習得、皆と一緒に音楽を楽しむ経験、具体的な子どもの生活の場で歌わせるこ

と、「よい音楽」に接する機会を多くすることを進めていきたいとした(②:18-20)。教師たちは子どもにとっての流行歌の魅力認めつつも、情操教育の点から弊害や悪影響があると考えた。

以上の報告を大田研究室は「立派な考え方」と前置きしたうえで、一般に情操教育で一番注意すべき点は、環境が悪い、漁師の子どもだから粗雑だ、だから情操教育でよい子にしようといった表面的にだけ問題解決しようとする事だと述べた(②:20)。浜者の子どもの性質や置かれた環境が往々にしてさげすまれやすく、そこに情操教育が安易に導入されることを大田研究室はなおも警戒していたように思われる。

(9) 子どもの遊び

富崎小学校の教師、とくに低学年を担当する教師たちは、大田研究室の通信では「子どもの遊び」についてほとんど触れていないことに「満たされない」ものがあつたと言明した(②:32)。遊び道具をもたない子どもや、子守などの家事労働のために遊べない子どもの存在、富崎遊びの男女差の少なさ、魅力的な遊びとしての映画の位置といった遊びの現状に対し、問いを投げかけたものであつた(②:33-35)。

この報告について、大田研究室は「われわれの盲点にふれている点が多数あります。われわれは現象を理詰めに見過ぎたことによって、ことに、低学年にはあまり目を注がなかったことによって、子どもの生活を豊かに把握できなかった点を反省しています」と書き送った。そして低学年には労働の価値をわからせるより、「自由で旺盛な自己表現をやらせる」ことを第一とするよう提案した(②:36)。漁村の子どもの日々の生活を貫いている遊びの中にこそ、現実の子どもの姿が、また富崎が、むき出しにされているとする低学年の担任教師の考えに、大田研究室も首肯するほかなかつた。

(10) 夜遊び(校外生活指導)

大田研究室の通信では「校外指導の面」が調査されていないとして、富崎小学校の教師たち

は子どもの「夜遊び」についても組上に載せた(②:37)。3人の男児が夜に柿を取りに行こうと計画したが頓挫した例を挙げ、その後、家庭に「事件」の全部を話して理解を仰ぐ、子どもの疑問に教育的に対応する、子どもの読み物や友だち関係に注意する、子どもの変化をすぐ知らせ合う、映画やラジオ番組への子どもの関心に注意を向ける、遊びの傾向をよくみる、青年との接触の場を充分考慮するなどの「対策」を立てて男児たちの家庭を回ったことを報告した(②:39)。学校でいくら「よいあそび」を指導しても、友だち同士、青年から覚えた遊びに走りがちだとして、校外の生活指導の計画を立てる必要性を論じたものであった(②:40-41)。

子どもの遊びへの着眼を高く評価した大田研究室も、夜遊びについての教師の実践報告には、子どもの夜遊びを「大人や青年たちの習慣と結びつけて、単純に価値判断することは非常に危険なことです」と警鐘を鳴らし、「もっとのんびりと子どもを観るセンスを養うことが必要ではないか」と指摘した(②:41)。校外生活指導において子どもの行動の値打ちを判断する教師の価値観をこそ鍛え上げるべきとの議論であった。

(11) 部落行事(初午)

富崎小学校の教師たちは、布良・相浜の多くの部落行事のなかで2、3の行事について、岡者と浜者といった階層差による価値観の対立が親や子どもの間にあるとし、そのような傾向が著しく認められる「初午」の行事に焦点を当てて報告した(②:42)。これは大田研究室が提示した岡者と浜者との差異、漁民の生活に根ざす劣等感などの視点から、教師が自分たちで掘り下げたテーマの1つであった。

富崎村の初午の行事では、主に男子が仲間グループで部落の家々を数軒、多くて2、30軒回り、唄と踊りを披露し、お金をもらうのが慣例であった。学級の中では初午について賛否両論あるなかで、子どもたちの間に「初午をやると漁があるぞ」という噂も生まれ、比較的貧困な漁民の子どもたちが初午を「頑強に」主唱する

ようだと教師は捉えた。漁民の子どもたちは家計に関心をもち、また初午で得た金を子ども郵便局に貯金するために一時家の人に預けたり、家のために提出したりした子どもがかなりの数であることから、初午の行事が引き継がれているのは「貧困」と直接の関連で考えていかなければならないと認識された(②:43-45)。この問題を親と一緒に考えていくために、教師たちは子どもと行事との関係を掘り下げること、行事を学級の問題として自由に子どもに話し合わせ、父母とも一緒に考えていくこと、以上のことをできるだけそのまま記録にとって自分たちの話し合いの材料にすることなどの具体的な計画を立て始めていると報告した(②:47)。

大田研究室はこの報告を読んで、「長い間しいたげられて来た漁民の奴隷的根性の現れをたたき直す気持がはっきりとみとめられます」と教師の姿勢を認めた。ただし、初午だけに取り組むのは不十分であり、「子どもの働くことの価値を多方面の教材を通じてつかむことがなければなりません」と忠告した。働かなくても金をもらえる初午の行事の問題提起にこだわるばかりでなく、広範囲の学習と仲間づくりを通して、子どもたちに労働の価値を広く掴ませることを大田研究室は期待した(②:47)。

(12) 親子関係

富崎の教育の向上のためには「親子関係を深くつっこんで調べてみるのが、大切」との考えから、教師たちはとくに母親と子どもの親子関係について取り上げ、大田研究室に指導を求めた。富崎の場合、父親は一日中沖に出て働いているため、子どもの生活を一切と言ってよいほど母親がみており、家庭訪問でも父親と話すのはスムーズにいかないこと、子どもは母親を他所ではみられないくらいに頼り、母親も子どもの将来に希望をかけていること、しかし貧困による悩みとして勉強部屋なども用意できず、子どもに仕事を言いつけたり、しかりとばしたりして子どもと語り合う機会が少ないことなどを知り得たと報告した(②:48-52)。

以上の報告を受けて大田研究室は、親と子を

めぐる問題について「われわれの考えた以上に、問題が深められています」と述べた。「日本の教育は、人間的な愛情の発掘の問題から出発すべきではないか」という問題を端的に突きつけるものとして本報告を位置づけた(②:52)。

(13) 家庭生活

低学年担当の女性教師たちは、大田研究室の『漁村の教育計画』のことは「戸惑い」と「驚き」をもって読んだと記した。そこでどうしたらよいかを話し合い、「子どもの問題を考えるにしてもそれを突込んで行けば家庭生活のことと結びつけて考えなければほんとうにはわからない」との意見で一致、子どもと家庭生活に関する問いを立てた(②:52-53)。

たとえば、学校の運動場以外に適当な遊び場のない富崎の子どもは、映画や紙芝居などのお金が必要なものと引きつけられており、また親の職業別の買喰い調査結果から、経済的に最も苦しいと思われる漁民の家庭が「子どもの要求に応じてドンドン金を与えているという事実」を知ることになった(②:55-56)。さらに教師たちは、漁民の2人の母親から話を聞き、数人の人たちが毎日いくらかの金を積み立て、お金のいる時に借りることのできる「日掛け」という仕組みがあるが、漁民はほとんどが自分の掛け金より余計に借りてしまっている状況で、畑のある人はともかく、子どもが生まれてから年中変わらないやりくり生活のため、いくら働いてもどうにもできないこと、お祝い事などの「つきあいがはる」ために借金をしてでもやろうとするような生活を改善すべきこと、PTAの実行委員にもいろいろな方面から代表を出すべきことなどの母親の声に触れることになった。女性教師はこうした母親の「エネルギー」に「突破口」を見出し、グループ活動において話し合っては考え調べることを繰り返しながら、少しずつ前進していると報告した(②:58-61)。

大田研究室は以上の実践報告を読んで、「浜者の家庭生活についてわかろうと努力している

ことにとっても関心をもってきました」と述べた。ただし「貧乏だけれど、つきあいはとても無駄が多い」という悪い習慣を改めようという母親たちの動きと手を握る前に、「子供をめぐってお母さんたちの心配」を受け止めていけるように、子どもを仲立ちとして話し考えるようにならなければならない、悪い習慣を改めましょうといったことを「観念的にスローガンのように叫ぶ前に、もっともっと具体的な問題でつながることが大切」だと指摘した(②:61)。子どもを接点として、日頃の家庭生活における細々した問題を気楽に話し合えるような結びつきこそが、教師と親(母親)との間に築かれるべきことを述べたものであった。

まとめに代えて

これまでみてきたように、1953年の富崎村調査を機に、ことばの教育、生活指導、教科指導、社会教育、情操教育、子どもの遊び、親子関係、家庭生活など多岐にわたる教育計画論が、大田研究室と富崎小学校の教師との間で活発に交わされていたことが明らかとなった。本稿では、教師の受け止め方や教育計画の見直しといった教師の側の意識や取り組みにも着目し、漁村の教育計画をめぐる研究と実践を跡づけてきた。

富崎村における教育計画の見直しは、富崎という一漁村に残るいわゆる封建的遺風、すなわち岡者と浜者との階層的対立、浜者の村落内での劣位といった現状を社会調査の手法によって明るみに出し、それを地域の中で克服していくための教育を創造する試みでもあった。こうした漁村が抱える固有の課題を乗り越えるべく、地域教育計画とそれに基づく教師の教育実践とが反省的に捉え返され、漁村の主体である浜者の生活・労働世界に根を下ろした教育実践の計画化が志向されたのであった。ここに、下層の大衆の組織化に失敗したと大田堯が自ら振り返った本郷プラン以降の、大田の「地域の中に教育を問う姿勢」の「転回」¹⁷とそこに至るまでの探究の跡をうかがうことができる。

もっとも、大田研究室の漁村の教育計画への

分析・評価は、富崎小学校の教師たちに一様に肯定的な受け止め方をされたわけではなかった。事実、千葉県教育研究所の学校教育部第2室の所員は、大田研究室から『漁村の教育計画』を受け取ったとき、教師たちは「読むたびに話し合うたびに、何かしら『カチン』としたものを感じ、それが相当の間続いてきた」と率直に記している(②:1)。とりわけ岡者と浜者との間に長い間矛盾を生じさせてきた富崎村の社会構造に斬り込む大田研究室の分析視角は、目前の子どもたちの姿から教育上の諸問題に向き合おうとした教師たちにとって、必ずしも容易に理解できるものではなかったと考えられる。目の前にいる子どもたちが、同時に歴史的に構築されてきた富崎の社会の仕組みの中に否応なく埋め込まれた存在であることを、どのように理解して教育実践に結びつけていけばよいのか、それが「岡者」としての教師自身の課題であった。

学校における標準語の指導やPTA活動の見直し、さらには子どもの遊び、親子関係などに関する富崎小学校の実践報告は、大田研究室の問題提起に即して、あるいはそれをより発展させたかたちで、漁民の子どもや親たちの中に食い込んでいく新たな試みが学校現場で生まれつつあったことを確かに示すものであった。他方で、子どもの労働の捉え方、子ども郵便局の貯金のあり方をはじめ、大田研究室の問題提起に刺激されながらも、教師との間で考え方や実践の進め方に齟齬を来す場面もみられた。したがって、富崎村の教育計画の立て直しは、必ずしも大田研究室が提示した方向性を順当に辿ったわけではなかった。むしろ、教師たちの驚き、戸惑い、不満、反省などの複雑な思いを伴いながら、それゆえに研究と実践との相互の緊張関係が生まれ、そのような関係性のなかで1950年代の富崎村の教育計画の練り直しとその具体化が模索され続けたことが重要であろう。

なお、大田研究室と富崎小学校の教師とのやりとりをまとめた2つの『漁村の教育計画』刊行以後の富崎村の教育計画の動向については不

詳であり、本稿では検討が及ばなかった。

今後は、富崎村の教育計画でも論点になった、1950年代から60年代にかけての漁村における標準語教育・ことばなおしの動きを中心に、漁民の子どもたちのことばの教育や生活指導にかかわる歴史的実践の解明を課題としたい。

付記

本研究はJSPS科研費(課題番号:17K04534)の助成を受けたものである。

参考文献

- 1 福井雅英『本郷地域教育計画の研究—戦後改革期における教育課程編成と教師—』学文社、2005年。
- 2 越川求『戦後日本における地域教育計画論の研究—矢口新の構想と実践—』すずさわ書店、2014年、16頁。
- 3 同上、38頁(注16)。
- 4 大田堯研究室の富崎村調査の概要については、大田堯「漁村の教育計画—富崎村調査報告—」(東京大学教育学研究室、1953年)参照。筆者は、東京大学教育学部図書室において本資料の複製を閲覧した(ただし、複製資料ではページの欠落あり)。
- 5 前掲大田「漁村の教育計画—富崎村調査報告—」6-7頁。
- 6 千葉県安房郡富崎高等尋常小学校「富崎村漁業沿革史」(1924年、1-2丁)、富崎村古文書保存会編『富崎村古文書(複製)』1979年所収(館山市立図書館所蔵)。
- 7 「富崎村に於ける水産物生産高」、前掲『富崎村古文書(複製)』124頁。
- 8 千葉県総務部統計課『沿岸漁業臨時調査の結果概要(臨時漁業センサス) 昭和33年11月1日現在』1959年、111-112頁。
- 9 前掲大田「漁村の教育計画—富崎村調査報告—」1頁。
- 10 同上、2頁。
- 11 同上、2-5頁。
- 12 同上、5頁。

-
- ¹³ 同上, 6頁。
- ¹⁴ 和洋女子大学メディアセンター所蔵。附録の「二つの教育計画」は, 1954年5月14日の千葉県教育研究所の長期派遣研究生の研究会合における大田堯の講演速記録である(広島県本郷町と埼玉県土合村の教育計画に関する内容)。
- ¹⁵ 千葉県立中央図書館所蔵。第14集は当館に所蔵がない。
- ¹⁶ 子ども銀行・子ども郵便局については, 吉川卓治『「子ども銀行」の社会史—学校と貯金の近現代—』(世織書房, 2016年), 第6章『「子ども銀行」の時代』参照。
- ¹⁷ 大田堯『地域の中で教育を問う』(新評社, 1989年) 94頁, 第4章「地域の教育計画(一九五二年)」の大田による解説。
-